

【エッセイ部門・奨励賞】

大みそかにインフルエンザにかかった話

京都府立海洋高等学校 第3学年 稲葉 悠真

体が丈夫だからバカだからなのか、生まれてから高校三年生の今まで私はほとんど風邪をひいたことがない。今回はその数少ない風邪体験をひとつお届けすることとしよう。

小学生のころ、私は大みそかにインフルエンザを発症した。高熱にもだえ苦しむ私を見て父は近くの総合病院へ連れていった。受付は驚くほどごった返しており、一時間も待たなければいけなかったのであるが、風邪慣れしていない私にとってはとんでもない苦行であった。もうろうとする意識の中「あアこのまま死ぬんじゃないか」などとネガティブすぎることを考えていたら、予定より早く処置室に運ばれ、入院をすすめられた。どうやら思ったよりも重症らしい。当時の私はこの時、年越しそばのことしか頭になかったので元気を全力でアピールするという奇行をやった。そして止める医者を尻目に即日退院してしまったのである。しかしそんなに事が上手く進むはずもない。案の定、私は一晩中頭痛、吐き気に苦しんだ。そして元日から病院通いをするはめになったのだ。私は元来病院が大嫌いであり、病院に行くくらいなら重症になるほうがずっとマシなどと考えていたので行きたくないことを一応駄々をこねてみたものの、そんな願いもむなしくあっという間に到着してしまった。いやはや近いということも良いことばかりではない。正月から熱を出す哀れな人間は少ないからか、すぐに呼ばれ、医者が点滴を持ってきた。医者は「血管の中に針を打つからちょっと痛いよ」などと言いながら準備している。笑顔で恐ろしいことを言うという医者に若干の恐怖を覚え、決心が鈍った私の血管は引っこんでしまい、最終的に六人の医者に押さえられながら点滴は完了した。このとき医者に囲まれて「がんばれ、がんばれ」などと言われながら六回も刺し直されたのは今でもトラウマである。点滴は一度刺してしまえば意外と痛くないもので、少し感動した。そして一息つくひまなくレントゲンを撮られることになったのだが、これもまた驚きの連続であった。レントゲン写真というのだからカメラがあるのかと思って入った先はいたく殺風景な部屋であり、服を脱いで、台のようなものに胸を押しつけるように言われた。指示通り、死んだカエルのようなポーズで胸を押し当てていると奥の方から「ガチャコン」と音がなり、撮影は終了した。当時の私はまさか終了したとは思っておらず、医者が戻るまで件の死んだカエルをずっと続けていた。今思い出しても赤面してしまう。その他心電図や心音などの検査を行い、たらい回しは終了するはずであったが急遽エコーなるものを行うことになった。点滴やレントゲンは体験したことこそなかったものの存在自体は知っていた。しかしこのエコーは聞いたことすらない。どうかそのエコーというモノが恐ろしくありませんようにと祈りつつ指定された部屋へ行くと、医者がすぐに説明をはじめた。説明を受けるうちにエコーなるモノに対しての恐怖はうすれ、点滴の時に説明しないでさっさと打てと思っていた数十分前の私を叱りたいとさえ思った。聞くと

どうやらゼリー状のものを腹や胸にぬり、器具を上から当てることで内部の様子を見ると
いうものようだ。聞くぶんにはずいぶん楽しそうである。ところがいざ始まると思った数
倍ゼリーが冷たく、いきなり驚いてしまった。それに加え、この器具が絶妙にくすぐったい
のである。しかも検査中は動くことができない。もともとこそばゆいのが嫌いである私にと
って、そうとう苦行であったのは言うまでもない。検査が全て終わり、診察室に戻ってきた
私の体は疲労の限りを尽くしていた。これが熱によるものか、朝からの検査によるものか、
はたまた両方なのか当時の私には知る由もなかったことであるが、当時は「とにかく病院か
ら帰れるぞ。」という思いばかりが頭にあった。そもそもなぜこんなタイミングでインフル
エンザなんぞにかかり、正月までこんな思いをしなければならなかったのか。思えばこれま
での病気体験は数えるほどしかなかったものの、決まって大事なときに発症していた。沖縄
旅行の日には胃腸炎、北陸旅行では水疱瘡、学校行事の日にプール熱で出席停止になるなど
ロクな思い出がない。ウイルスや菌やらにも少しタイミングというものを少し理解してい
ただきたい所存であるが、無論、病原体どもがそんなことをわかまえているはずもなく、い
まだに大事な時に病気になるのだ。もっとも今回はインフルエンザであり、そこまで命にか
かわる病気でもなかったなのでその点は幸運といえよう。

ちなみに長い検査の末、インフルエンザと肺炎の両方を同時に発症していたことが分か
ったらしい。十分重い病気じゃねえかよと思いつつ、これまで一番何とも言えない気持ちに
なった正月であった。